

第一講 歴史的仮名遣い

文語と口語の違い

* 現在私たちが日常会話などで使っていることばを口語といい、古典などに使用されている昔のことばを文語という。

* 文語文は口語文に比べて、助詞の省略や体言（名詞）の省略が多いという特徴がある。

例 ある人、あがた 県の四年五年果てて、例のことも皆し終へて、よとせいつせ 解由げゆなど取りて、……

^ある人が、地方勤務の四五年が終わって、例のことも皆し終えて、解由げゆなどを取って、…∨

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず。

^冬は早朝が（よい）。雪が降っている（早朝）は言つまでもない∨

* 文語文は口語文に比べて、主語が省略されることが多い。

* 紙の上を書く時には、口語文が現代仮名遣いを使うのに対し、文語文は歴史的仮名遣いで書かれている。

まず、歴史的仮名遣いが読めないと、古文の学習を進めることができない

歴史的仮名遣い

【練習問題】読んでみよう。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明りて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。
夏は、夜。月の頃は、さらなり。闇もなほ。蛍の多く飛びちがひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。

秋は、ゆふぐれ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも。また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、温く緩びもていけば、火をけの火も、白き灰がちになりて、わろし。

(枕草子)

歴史的仮名遣いから現代仮名遣いへの転換のルール

ルール 固定されている読み

表記 む・ゑ・を・ぢ・づ・くわ・ぐわ

読み い・え・お・じ・ず・か・が

例 やまのゐ(山の井)

ゑむ(笑む)

をどこ(男)

かぢ(舵)

づじ(厨子)

くわし(菓子)

えいぐわ(栄華)

語頭以外（＝語中・語尾）の八行表記はワ行で読む

表記 は・ひ・ふ・へ・ほ

読み わ・い・う・え・お

【例題1】次の各語を現代仮名遣いに改めなさい。

をり（折）

ゐる（屈む）

こずゑ（梢）

かはら（河原）

かひ（貝・甲斐）

ゆふべ（夕べ）

ここのへ（九重）

すなほ（素直）

はな（花・鼻）

あさひ（朝日）

ルール

ア・イ・エ段表記に「う・ふ（ウ）」「が付くと」「オウ・ユウ・オウ」と読む

A 「a + u」型

表記 aう・aふ a u

読み おう o

例 あうむ (aumu) おうむ (鸚鵡)

B 「i + u」型

表記 iう・iふ i u

読み ゆう yu

例 さいう (saiu) さゆう (左右)

表記 eう・eふ e u

読み よう yo

例 えうなし(e uなし) ようなし(要無し)

【例題】次の各語を現代仮名遣いに改めなさい。

かうし やつやつ

きう しうか

てふてふ けふ

ワ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	
わ	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア段
		み	ひ	に	ち	し	き	い	イ段
	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ段
		め	へ	ね	て	せ	け	え	エ段
を	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ段

【演習問題1】 次の各語を現代仮名遣いに改めなさい。

あはれ

ほのほ

思ふ

かへす

をかし

まゐる

あひだ

ゆくすゑ

【演習問題2】 次の各語を現代仮名遣いに改めなさい。

あふぎ

まじす

いうなり

てつど

くはつじゆ

きぢやう

にふだう

けふそく